

特別企画

特別企画

天安門事件 その影響と展望



東京外国語大学教授

中嶋 嶺 雄

本稿は、平成二年五月二十三日のインタビューで口述された内容を収録したものである。
なお、本文中の海外の写真は読売新聞社の提供によるものである。

はじめに

現代の世界は、まさに歴史的な変動が生じているわけで、後世の歴史家は、一九八九から九〇年にかけて起こった、この世界史の巨大な地殻変動を二十世紀最大の歴史の転換として書き残すことになるのではないかと思われまます。

言うまでもなく、昨年の六月に起こった中国の天安門事件。そして秋から冬にかけて起こった東欧諸国の社会主義体制の内部的崩壊。そして、この間にソ連のペレストロイカが進捗する中で、これまで抑えられていたソ連社会の矛盾が特に経済問題や民族問題を中心として爆発したわけでありまます。いまやアジアの中で独裁体制を維持してきたモンゴル人民にまで及び、一党独裁の崩壊に直面し、いわゆる社会主義からの離脱を図ろうとしております。

このような状況の中で中国に社会主義の崩壊の余

波がどのようなかたちで訪れるのか。さらに、中国と日本の狭間に存在する東アジアのユニークな、そして、最も強固な独裁体制を堅持している朝鮮民主主義人民共和国の行方があるかなるのか、といったところには多くの人々の関心が集まっていることは言うまでもありません。こうした状況を考えてみると、まさに今日は歴史的な転換期に直面していると言っているのではありませんが、これらの問題について、私自身が昨年からつい最近まで中国、東欧、ソ連及び北朝鮮を訪問した経験を踏まえて語ってみたいと思いま

す。

天安門事件の真相

まず、中国ではありますが、中国の天安門事件は大変な悲劇をもたらしました。しかしながら、考えてみると、この中国の悲劇を大きな代価として東欧諸国が、ルーマニア以外一滴の血を流すこともなく社会主義体制



5月17日 民主化要求を求めて天安門広場を埋めた100万人デモ

を自ら放棄することになったと言った過言でないほど、天安門事件の影響は大きかったと思えます。

ご承知のよう

に、天安門事件は昨年四月十五日の胡耀邦の死を契機とする学生たちのデモに端を発したわけでありまます。つまり、民主化を求める学生や知識人たちは、今日の中国が依然として共産党のもとにあり、しかも鄧小平ワンマン体制と思われるような人治によって政治が行われている。そして、官倒現象や赤

い貴族の独裁と言われるような腐敗現象が中国共産党を冒し、まさに共産党の体制は中国の学生や知識

人にとって、いまや打倒すべき対象になりつつあったと言っていると思います。そうした状況の中で、学生たちは民主化運動という方法を通じながら真向から中国共産党の一元独裁体制に挑戦したと言ってもいいのではないかと思います。私はその意味で、まさに中国の民主化運動は反革命、カウンター・レボリューションであったと見なしているわけで、それも人治に代わって法治、法に基づく政治を求めるという、いわば近代的な政治意識に裏付けされた、一種の市民運動的な広がりを持って、一時は首都北京を席捲したのであります。

そうした中で、五月十五日から十八日までのゴルバチョフ訪中は、中国の民主化運動に一層大きな火を灯しました。ゴルバチョフは中国の学生や知識人たちに大歓迎され、彼はそのゴルバチョフ歓迎の人民の波に遮られて、首都北京では人民英雄記念碑に献花をすることもできなかったのであります。こうした状況の中で、特に私が重視するのは、昨年五月十六日夕方の趙紫陽・ゴルバチョフ会談でありまして。この趙紫陽・ゴルバチョフ会談において、すでに党内で孤立していた中国共産党の最高指導者・趙紫陽総書記は、この会談の冒頭十分間を中国中央電

いった時間がそこに存在したのであります。

中国の最高権力者は、一種の二重政権状況に陥っていたと言っているでしょう。こうした中で、五月十八日の夜から十九日の早朝にかけて、趙紫陽総書記は天安門広場に自ら出向き、学生たちに向かって「私がここへ来るのが遅すぎた、あなたがたの要求は当然だ」と言っ

て涙ぐんだ場面は多くの日本人の脳裏に鮮明なところだと思えます。こうした状況の中で趙紫陽氏は、一時有利に向かったものの、五月十九日の夕刻、彼はおそらく軟禁されたのでしょう。

以後、趙紫陽の動静は今日に至るも全く定かでない、行方不明のままであり



5月21日 トロリーバスをバリケードにして戒厳部隊の進入を阻止しようとする市民たち (北京崇文門で)

視台(中央テレビ局)が全世界に放映するという瞬間を捉えて、当の最高指導者が自ら党の最高機密を洩らすことによって鄧小平、李鵬らの強権派、保守派と訣別し、彼自身が民主化運動の側に立つことを宣言したのであります。具体的には、「中国では全ての重要事項の決定が鄧小平同志に委ねられている」という、十三回中全会の秘密決議を洩らすことになって、広場の学生たちに自らの孤立無縁の状況を伝達するとともに、鄧小平と訣別し、打倒鄧小平に賭けることを宣言したのでした。私は当時HNKのテレビでこの画面を解説しておりましたが、私自身趙紫陽総書記の言葉に驚いたのみならず、当のゴルバチョフ書記長は目を白黒させて、大変な衝撃を受けた様子をありありと覚えております。

この趙紫陽発言を契機として北京のデモは百万を上回る規模で盛り上がりました。つまり、五月十七、十八、十九日は雪崩をうったように趙紫陽側に加担する大衆運動が高揚し、党、軍、学生を含めて「李鵬打倒、鄧小平引き下がれ」という要求が高まっていったのであります。つまり、民主化運動という大衆運動と、党内の権力闘争がこの時点においてまさに結合し、いわば李鵬、鄧小平が不利になっ

の保守派の重鎮である楊尚昆国家首席が果たした役割は、一族が人民解放軍を牛耳っていることと共に、きわめて大きな政治的意味を持ったと言わねばなりません。こうした中で五月十九

日の夜遅く戒厳令の施行が布告され、実際には翌二十日の午前十時から発令されたのであります。しかしながら、戒厳令を施行したにもかかわらず、状況は依然として膠着状況でした。一方、学生や知識人たちは戒厳下においてできるだけ犠牲を少なくしようという配慮のもとに、また、四月から始まった長いデモに疲れ、六月三日から四日にかけてはわずかに三千名ぐらいの学生が天安門広場に残っていたのにすぎなかったのであります。三千名の学生を排除するのは、いわば公安警察の力で十分であり、催涙弾、警棒を使って処置できたのにもかかわらず、この三千名の学生を排除するために、何と十万の正規軍がソ連製の銃を水平に撃ち込んで広場に突入したのであります。

また、日本の防衛庁やアメリカの国防総省が確認しているように、六月二日、三日、四日、五日前後には、何と北京市よりその近郊におよそ三十五万の人民解放軍、正規軍が展開していたことが確認されたのであります。

わが自衛隊の全勢力をもってしても、それに倍する規模の人民解放軍、正規軍が北京に展開していたという事実は、わずか三千名の学生を排除するためのものであったとは思えません。すなわち、天安門事件は一種の党内闘争の見せしめとして、その突破口として強行的に断行されたのであって、いわば中国は一種の二重政権状況、内戦一步手前の状況にあったからこそ、こうした軍の強行突破が必要になったのではないかと私は考えております。

これがまさに天安門事件の真相であったと言っているでしょう。それだけに、天安門事件の悲劇は深刻なものでした。そしてまた、

これが与えた衝撃は単に我が国のみならず、特に東欧やソ連にも大変なインパクトを与えたのであります。

う深刻な危機意識を抱いていたのであります。そして、天安門事件の状況を真剣に分析し、何としてでもあのような悲劇は避けなければいけないと彼らも考えた。そして、当の東欧の指導者たちも中国の悲劇が深刻であっただけに、こうした事態を避けようということでは、ある種の合意が働いていたと言っているのではないかと思います。

この中国の悲劇の大きな代価を認識することなく強行的に突っ走ったルーミアのチャウシェスクが衆知のように悲劇的な断末魔を迎えたわけですが、このように考えてみると、まさに天安門事件の悲劇を内証にして東欧の社会主義の崩壊が促進されたと言っても過言ではない、と思われまします。また、ソ連もかつてのように制限主権論を行使するようなブレジネフ時代のソ連であったならば、東欧の事態は座視することなく軍事介入したでしょう。しかしながら、ゴルバチョフ自身自ら民主化の旗手として北京の学生達に迎えられ、そして、ペレストロイカやグラスノスチによってソ連社会を根本的に変革しようとした立場があるわけです。東欧の事態に対して武力的な介入を行うことは出来なかつたのであります。こうした状況が、まさに東欧情勢を大きく揺る

パンドラの箱



天安門事件の悲劇は深刻と語る中嶋教授

私は天安門事件直後に『中国の悲劇』という著書を講談社から書き下ろした後に

東欧に飛びました。『カールマルクス』も学び、教えたことがある由緒あるフンボルト大学で、天安門事件に関するセミナーが開かれたのであります。

このセミナーでは中国問題が集中的に論議されましたが、東欧の知識人たちは当時ホーネッカー独裁体制のもとにあって、もしかすると、東ヨーロッパのベルリンにも天安門事件が起きはしないかとい

がしていった背景にあったと言っても過言ではありません。

さて、私自身十一月中旬から下旬にかけてモスクワを訪れ、さらに、科学アカデミーや極東研究所を中心に講演、その他の学術交流を続けてきたのであります。その際に印象的であったことは、ペレストロイカはまさにパンドラの箱ではないかということでありました。これまで、厳重な法制のもとで締めつけられていたソライズム社会の籠かごが緩ゆるんだのであります。ギリシャ神話のパンドラの箱は、箱を開けてみると諸悪が世にはびこったと言われるわけですが、ソ連がこれまで持っていた積年の矛盾や病弊が一挙に噴出したと言っているでしょう。

ペレストロイカによってソ連の知識人や市民の考え方は大きく変わりました。言論の自由ということからすれば、これまでのような教条的な発言から極めてフレキシブルな発言に転じたのであります。また、様々な反対意見が提起されるようになりまして、ゴルバチョフその人に対しても反対意見が立ちこちで出ていることはすでに知られている通りであります。

こうして考えてみると、ペレストロイカはもの

考え方、発想の転換という、つまり、何もしないでできることはすぐに実現したのでありますが、しかしながら、ソ連社会に根を張っている民族問題、あるいは、エスニシテ

イの対立と言われるような問題が一举に解決するとはとても思われません。それが今日のバルト三国におけるソ連からの離反傾向であり、あるいはウクライナやグルジア共和国の独立問題、あるいは、それに先立つアルメニア、アゼルバイジャンの民族紛争であったと言っていると思います。こうした

紛争は、ソ連がいわゆるレーニン主義の民族理論では、もはや立ち行かないということを示したのみならず、ゴルバチョフ大統領その人もいまやレーニン



チャウシェスク政権打倒後もブカレスト市内のあちこちで銃撃戦が繰り広げられた

からの訣別をしばしば語らざるをえない状況になっております。

一方ソ連経済は、たいへん深刻な状況にあり、特に消費物資の不足、あるいは、経済効率の悪化、科学技術分野の著しい立ち遅れ、これからの問題はソ連がいくら発想の転換をしてもすぐに解決できる問題ではありません。外貨が不足するソ連は、さる十一月一日からルーブルの対外貨交換率を一举に十分の一に切り下げるといふ荒療治をしたわけですが、それによってもソ連経済は上向いていないと言っているのだからと思います。

こうした状況から脱却するには、きわめて長い年月が必要になるでしょう。そして、ソ連は従来のようなGNPのおよそ十二〜三%に近いと思われる軍事支出を削減することを余儀なくされたわけで、まさに米ソの緊張緩和はソ連自身の

弱さの表れだと言っていると思います。こうした中で、いまソ連の世界戦略も大きく転換しつつあるわけですが、こうした転換がわが

国の安全保障政策にも様々な影響を与えようと思われるわけです。わが国としても真剣な対応が迫られるのではないかと私は考えております。

中国はこま

一方、このような社会主義世界の変貌が再び中国に大きな影響を与えるのであろうか。私はこの四月下旬から五月上旬まで北朝鮮を訪問する前後北京に立ち寄りました。たまたま昨年の民主化運動デモの高揚した五月四日の天安門広場を見てみると、あらゆる所に公安警察や人民武装部隊が警戒していて、徹底的な弾圧を行っております。一方で、西側諸国向けに戒厳令を解除したり、一部の天安門事件の活動家や、天安門事件によって逮捕、摘発された学生や知識人を釈放しているものの、例えば北京政法大学・陳教授のように、昨年天安門事件で学生たちと共にマイクを握ったというだけで懲役十五年という反革命罪が課せられているのであります。

こうした中で、いま中国は徹底的な恐怖政治の巷にあると言っているでしょう。学生たちは天安門広場に近づけないように強制されているのみならず、

各大学には政治思想統制が厳しく、公安部や国家安全部の要員たちがキャンパスに進駐して反社会主義的な言動を取り締り、さらに、マルクス主義、社会主義の政治教育を再び行っております。もちろん学生たちはそんなものをもはや信じることはないわけで、例えば、ルーミアニアのチャウシェスク大統領夫妻が処刑されたニュースを知った学生たちは、あちこちで夜陰に紛れて爆竹を鳴してこれを祝福しておりました。こうした状況は、まさに中国では民主化運動の火は消えていないばかりか、潜在的にはますます地下において拡大していると言っていると思います。地縁血縁のネットワークや様々なネットワークを通してこうした民主化の輪が拡がっており、つい最近、あれほど厳重な警戒をくぐり抜けて北京師範大学の活動家と知られた柴玲女史が、パリ脱出に成功したということは、それを如実に物語っていると思います。

さて、こうして中国は間もなく天安門事件一周年を迎えるのですが、当面はこうした抑圧の中で再び民主化運動が爆発するという可能性は極めて少ないのであります。

一方、中国は鄧小平氏もいよいよ八十六歳になり

ます。八人の老人が国を治めると言われた革命第一世代の頑固な指導者たちが、あと数年のうちに影響力を失うことは目に見えております。民主化運動の指導者たち、あるいは、海外に亡命している民主化運動の活動家たちは、いまや時間との闘いの中で、次のタイミングを慎重に考慮しているものと言わざるをえません。

しかしながら、中国の経済状況は決して順調ではなく、一九九〇年代からはこれまでの十年間の対外開放政策で借りまくった累積債務四百数十億米ドルを返済しなければいけないという厳しい環境にも直面しているわけです。そうして、依然としてインフレ圧力が強く、そして、いまや一億にも達するという潜在的な失業人口が、いわゆる流民となって全国各地を移動しているという状況があるわけであります。何時それらに火がついて、欲求不満が爆発しないとも限りません。しかも、党中央の権力闘争は依然として続いているようであり、状況のいかんによってはきわめて深刻な事態になる可能性もあると思います。そうした時に軍がどう出るかということは大きな鍵でありますが、昨年の天安門事件前後にも軍の中にはかなり学生側に加担する動きもありまし

デーを狭んだ時期に平壤を訪れたのでありますが、かつては柳京と呼ばれた平壤は、大変明るい美しい大都市だということに、まずおどろきました。大同江の両岸には、巨大な高層ビルが立ち並び、金日成を讃えるさまざまなモニュメント等、高層住宅や巨大なホテルも建っております。五月一日のメーデー会場は、昨年、ソウルオリンピックの会場に対抗してつくられたという、十五万人収容の巨大なスタジアムであります。しかしながら、どこに行っても金日成礼讃があるわけで、金日成神話がいたるところでつくられると



近代的なアパートが建ち並ぶピョンヤン中心街

た。ひとたび状況が転じた場合に、これはルーミアアの例にも見られたように、軍の中に反体制的な動きが出ないとも限りません。こうしてみると、中国はここ数年のうちに再び大きな試練にさらされるのではないかと私は考えております。そして、その時にはおそらく中国共産党、一党独裁体制がガタガタと崩壊し、あるいは、中華人民共和国、それ自体が解体の危機にさらされるのではないかと思えます。

北朝鮮はどうなる

ここまで考えてくると、残るは北朝鮮であるというのが衆目の一致したところであって、私自身北朝鮮については、そのような関心を持って、今回、平壤をお訪れました。今回の平壤訪問は、極めて異例なことではありますが、私どもが人選した日本国際政治学会訪朝団は、公式に訪朝したものであります。私自身、韓国には十数回も訪れていますが、これまで、北朝鮮自身が外国人に門戸を閉ざす、そして、わが国と北朝鮮が国交がないことによって、旅行はそう簡単なものではありませんでした。今回は、メ

いうことには驚嘆せざるを得ないのであります。それは、かつての毛沢東崇拜以上のものがあると言っているのではないのでしょうか。ただ、問題は、こうした金日成独裁体制と、金日成から、その長男の金正日氏への父子権力委譲という問題を、まさに社会主義としては許容し得ない、権力継承の形態を、一種の主体（チュチェ）思想という、ユニークな、独特なイデオロギ―によって正当化しようとしていることは、かなり浸透しているのではないかと思われたことでもあります。

私が見た最高指導者は、朝鮮社会科学者協会の黄長燁（ファン・ジャン・ヨック）委員長でありましたが、彼は、かつて金日成総合大学の学長を十五年も努めました。そして、チュチェ思想というイデオロギ―を考案した党中央委員会書記であり、また、金正日の指南役だとも言われておりますが、洋の東西の学問に通じた黄委員長は、私に、チュチェ思想は、人間を主体とする宗教であると言いました。こうした状況の中で、二千万の国民が、一種の新興宗教の教祖のもとに自己陶醉

しているというのが偽らざるところであったと言っているでしょう。しかも、平壤を見るかぎり、極めて清潔で整然とした町であり、全国が一種のサナトリウムのような清潔感にあふれています。もちろん、このことは、いわば人間味が欠如した、キムチの匂いがまったく漂わない人工的な都市だということにもならざるを得ないのであります。

こうして見てみると、少なくとも当分は北朝鮮は極めて強固な独裁体制のもとで、下からの民主化運動が起こる余地もないほどに統制のとれた強権体制を取っていると言っているのではないかと思えます。朝鮮労働党は、今日の南北朝鮮の対立や、一種の厳しい国際的孤立化の中で、ある種のレジテマシー、正当性を依然として保持しているように思われます。



金日成主席を称える歌を唱いながら登校する女学生（ピョンヤン市内で）

ということになりますと、金日成体制が続くかぎり、これが下からの大衆運動によってガタガタと崩壊するという可能性は少ないのではないかと。しかしながら、もしも金日成亡きあと、果たして金正日氏の体制で、今の強権国家が維持できるかどうかは、北朝鮮が経済的に極めて深刻な状況にあると思われるだけに、今後の重大課題だと思わなければなりません。特に、あの父子権力継承と、金日成個人崇拜の圧倒的な現実というものが、やがて崩れ去っていくのではないかと思われます。そうしたときに、北朝鮮がますます強硬な態度に出るといことが予想される反面、特に最近ではアメリカとの関係の中に、かなり意を用いている

ように、意外に柔軟な姿勢に出ていることも考えられます。つまり、私は、北朝鮮訪問において、しばしば

「マニア」との対比を提起したわけですが、彼らも、ルーマニアの情勢は、実に丹念に分析しているようで、今の社会主義の解体が、北朝鮮にとって極めて深刻な危機でもあるだけに、この轍を踏むまいと、さまざまな方向を模索する可能性もあります。その場合には、意外に革命第二世の金正日氏は、かつての蒋介石体制から蔣経国体制へと、状況が緩やかに転じていったように、意外に柔軟な対応をすることによって、北朝鮮全体の今後のソフトランディングを図っていく可能性もあります。その場合に、従来のようなかたくななイデオロギー一本やりの方向から、硬軟両面の対外政策に転ずるとい可能性についても、われわれは無視してはならないでしょう。

以上のように考えますと、北京の天安門事件から始まった社会主義の激動が、最後の北朝鮮がまさに崩壊することによって完結すれば、一つの歴史のドラマとしては、大変興味深いのですが、どうも私の見るかぎり、このアジアには、特に北朝鮮には、今すぐその条件があてはまらないのではないかと。気がするわけで、これらのことを含めて、わが国としては、真剣な対応が迫られると言えましょう。

略歴

なかじま みねお
中嶋 嶺雄 教授

昭和十一年 長野県松本市生まれ

昭和三十五年 東京外国語大学中国科卒

昭和四十年 東京大学大学院社会学研究科 修了

昭和四十四～六年 外務省特別研究員（香港）

昭和五十二～三年 オーストラリア国立大学客員 教授

昭和五十五年 パリ政治学院客員教授

昭和五十六年 「北京烈烈」で第三回サントリ

ー学芸賞（政治経済部門）受賞

主な著書 『現代中国編』『中ソ対立と現代』『新

冷戦の時代』『現代中国と国際関係』

『中国の悲劇』その他著・訳書多数

Monthly THE SHISHIN

修親

1990 7

